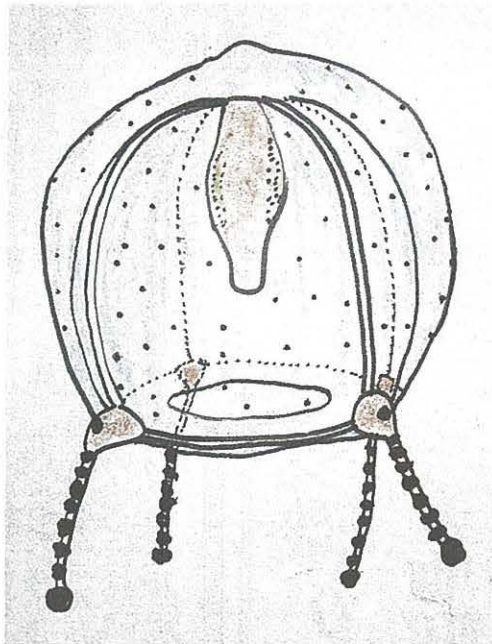


ヤマトサルシアクラゲ

田辺湾から記載された新種ヤマトサルシアクラゲ (内田1927改写)



久保田 信

72



今から1世紀近く前、ヤマトサルシアクラゲは数個体が田辺湾から採取された。これらの標本をもとに、筆者の恩師のそのまた師匠であ

る内田亭先生が1927年に新種記載された。採集日はその記載の5年前の22年11月1日である。
ヤマトサルシアクラゲは1ミほどの大きさの傘の上部にわずかな突起がある。特徴は4本の短い触手。各触手全体にわずから6、7個の刺胞の塊があるだけ。特に触手先端のものが大きく、丸くよく膨れている。他のクラゲと比べてみても、こんな短い触手で餌取りがうまくできるのか気になるところだ。おのおの触

手の基部の外側には眼点を1個ずつ備えているので光を感じられるはずである。

胃袋は単純な形で、その先端の口に特別な構造は何もない。胃袋で消化した餌は、4本の放射管を通じて体全体に栄養として行き渡らせている。胃袋の上半分くらいの箇所に生殖巣が形成される。

このクラゲのポリプは、田辺湾入り口の岩礁にひっそりと生息しているのを筆者が確認している。しかし、不思議なことに、白浜に来て以来、田辺湾でプランクトンネットをひき続けているが、この小さなヒドロクラゲは1個体も発見できていない。

91年発刊の瀬戸臨海実験所欧文報告に、このポリプ群体から飼育して成熟クラゲまで育てた生活史解明の論文を筆者はまとめた。ポリプはおのおの個虫の先端が赤いのが特徴である。それを目印として沖繩のサンゴ礁海域でも筆者はスキューバダイビングで採取しているので本種の分布は広いだろう。(京都大学准教授)